OUKA
Osaka University Knowledge Archive

Title	「廃棄の文化」に関する理論的検討 : メアリ・ダグラスの議論から
Author(s)	梅川, 由紀
Citation	年報人間科学. 2018, 39, p. 1-13
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67877
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

〈論文〉

「廃棄の文化」に関する理論的検討
――メアリ・ダグラスの議論から

梅川 由紀

論文要旨

昨今、いわゆる「ごみ屋敷」が世間を騒がせている。筆者は、ごみ屋敷とは単なるトラブルを超えて、ごみとモノの境界が問われる事象だと捉えている。こうした「ごみ屋敷問題」は2000年代半ば頃から社会問題化した。ごみ屋敷はそれ以前に存在しなかったわけではない。新聞記事を確認すると、少なくとも1968年には存在を確認できる。ごみ屋敷問題とは、現代のごみをめぐる社会意識や、ごみと人間の関係を象徴する現象と捉えることができるだろう。

日本社会は、ごみをいかに減らし、適切に処理するかに注意を向けてきた。しかし「ごみ屋敷問題」の登場が私たちに示すのは、環境・衛生問題、道徳意識の切り口のみでは語り切れない、ごみと社会あるいは文化との間にある深い関わりだ。人間は何をごみと捉え、ごみをどのように扱い、何を得ようとしているのか。社会生活や意識の変化と関連する「廃棄の文化」として、ごみやごみをめぐる行為を捉え直す時期がきているのではないか。

そこで本稿では、メアリ・ダグラスの議論の再検討を通して、「廃棄の文化」を検討する土台を構築する。第一にダグラスの秩序・無秩序の議論、両義性の議論を整理する。第二に、ダグラスの議論に向けられた批判について検討する。特にアンナ・S・ミーグスとケヴィン・ヘザーリントンの議論を論じる。第三に「廃棄の文化」を検討するうえの留意点を整理する。

キーワード

ごみ、ごみ屋敷、秩序・無秩序、メアリ・ダグラス、廃棄の文化

1．「廃棄の文化」という視点

国土交通省の調査によれば、いわゆる「ごみ屋敷」は全国250市区町村で確認されている（国土交通省2009）。近年、新聞やテレビで取り上げられる機会も増え、社会的関心も高まっているようにみえる。筆者もごみ屋敷に強い関心を持つ一人であるが、それはごみ屋敷問題が以下二つの理由において、既存のごみをめぐる問題とは異なる特徴を持つと捉えているからだ。一つは、ごみ屋敷の当事者と周囲の人々の間には、ある認識のずれが生じている。周囲の人々はそこに堆積するものを「ごみ」と捉えるのに対し、当事者はそれを財産や宝物だと捉えている。ごみではない対象を「モノ」と名付けるならば、ごみ屋敷とは単なるごみをめぐるトラブルという側面を超えて、ごみとモノの境界が問われる現場と理解できる。またこれまでの調査では、当事者は溜め込むモノに「心情的価値」を抱き、モノを溜め込む行為はアイデンティティ構築に大きく関係している様子を確認できた（梅川 2017）。従って、客観的には衛生的、道徳的

理由から堆積物を撤去することが望ましいように見えても、撤去するだけでは再び元の状態に戻ってしまうケースも多い。既存のごみをめぐる問題は、ごみを減らすことや、適切に処理することに注意が向けられてきた。一方ごみ屋敷問題は、ごみをただ処分すれば良いという、単純な問題ではないところに特徴がある。

もう一つは、ごみ屋敷という現象は少なくとも1968年から存在したにもかかわらず、大きく社会問題化するのは2000年代半ば以降であるということだ[1)]。看護学の岸恵美子は新聞のインタビューに対して、ごみ屋敷が社会的に注目されるようになったのは2006年頃からだと回答している（『京都新聞』2015.2.8朝刊，19面、『静岡新聞』2014.12.17夕刊，5面、『沖縄タイムス』2014.12.16朝刊，19面）。また、ごみ屋敷対策に積極的に取り組む大阪府豊中市の社会福祉協議会は、2006年2月から「ゴミ屋敷リセットプロジェクト（現在は福祉ゴミ処理プロジェクト）」を開始している（勝部 2011）。以上の事実からも、概ね2000年代半ば以降から社会問題化したと理解できるだろう。ではごみ屋敷は2000年代半ば以前には存在しなかったのかといえば、そうではない。「ごみ屋敷」というキーワードで新聞記事検索をかけると、最も古いもので1968年の記事を確認できた。当時は「クズで建てた4層のトリデ」という表現が使われているものの、記事内容やそこに添えられた写真を見れば、現代でいうごみ屋敷と変わらない（『読売新聞』1968.4.19夕刊，3面）。ごみ屋敷を社会問題として捉えること自体が、現代特有の感覚といえる。ごみ屋敷問題とは、現代のごみをめぐる社会意識や、ごみと人間の関係を象徴する現象と捉えることができるだろう。

このように、「ごみ屋敷問題」の登場が私たちに示すことは、環境・衛生問題、道徳意識の切り口のみでは語り切れない、ごみと社会、あるいは文化との間にある深い関わりだ。人間は何をごみと捉え、ごみをどのように扱い、何を得ようとしているのか。社会生活や意識の変化と関連する「廃棄の文化」として、ごみやごみをめぐる行為を捉え直す時期がきているのではないか。そもそもごみは、人間や社会がそれをごみだと認識することではじめて生まれる、社会的・文化的存在だ。ごみを環境・衛生問題、道徳意識の「結果」として捉えるだけではなく、ごみが生まれ、ごみと付き合う「過程」を捉える必要があるだろう。また廃棄の文化を検討するうえで、社会の発展とともにごみの質が多様化している点は、特に留意すべきであろう。例えば、後の議論でも触れるように、プラスチックごみに代表される「燃やせないごみ」は1970年代に登場した。ごみ自体が様変わりする中で、ごみと人間の関係はどのように変化しているのだろうか。現代社会の廃棄の文化を紐解くためには、これらの「新しいごみ」への着目が欠かせないだろう。

廃棄の文化の視点からごみを再考しようとする際、着目したいのが人類学者であるメアリ・ダグラスの著書、「汚穢と禁忌」に関連する議論である（Douglas [1966]2002=2009）。本稿では、ダグラスの議論およびダグラスの議論に対する批判について検討する。そのうえで日本社会の事例を概観し、廃棄の文化の検討上、留意すべき事項を整理する。

なお本稿で「ごみ」と示す対象は、各家庭から日常的に排出されるごみ（一般廃棄物）とする。

2. ダグラスの議論から捉えるごみ

2.1「秩序」「無秩序」という構造化

「汚穢と禁忌」は1966年に出版された、ダグラスの主著の一つである。本書は、アフリカ諸国の未開民族やレビ記の分析を通して、汚穢の概念を明らかにしている。内容は大きく二つの主張に要約できる。一つ目は、不浄や汚穢を「秩序」「無秩序」という構造の中に捉える視点を提示した。ダグラスによれば人間は、あらゆる事柄を分類し、体系化している。この正常な分類図式に当てはまらない異例なるもの（anomaly）や曖昧なるもの（ambiguity）を、不浄・汚穢と呼ぶ。例えばある西アフリカの種族は、一つの子宮から、一度に一人の人間が生まれることを正常だと捉えている（Douglas [1966]2002=2009: 111）。このような社会において双子が生まれた場合、これまでの分類によって保たれていた秩序が乱される恐れがある。双子という異例な存在は、秩序を乱す無秩序な存在とみなされるのだ。ゆえに社会は異例な存在を不浄・汚穢と捉え、排除し、秩序を保とうとする。従ってダグラスの言葉をかりれば、汚穢とは「本質的に無秩序」（Douglas [1966]2002=2009: 33）なもので、秩序だった空間においては「場違いのもの」（Douglas [1966]2002=2009: 103）と捉えられる。私たちがそれを避けようとするのは、不安、恐怖、畏怖、疾病に関する観念からだけではなく、それが「秩序を侵すものだから」（Douglas [1966]2002=2009: 33）なのだ。従って、「汚物を排除することは消極的行動ではなく、環境を組織しようとする積極的努力」（Douglas [1966]2002=2009: 33）だと理解できる。

従って、ダグラスは未開人が人体の開口部や排泄物に関心を持つのは、それが周辺部、あるいは境界性をもつからだと述べる。秩序・無秩序の分類上、「場違い」、「異例」、「曖昧」なるものとは、中心に対する周縁部、あるいは境界性という概念と深く関係する。ダグラスは、この周縁部・境界性を象徴的に表す存在が、人間の肉体の開口部だと捉える。周縁部・境界性は「〔前略〕あちこちに引きまわされれば、基本的経験の形態が変わってしまう〔後略〕」ため、「〔前略〕あらゆる周辺部は危険を秘めて〔後略〕」おり、ゆえに関心を持つと分析する（Douglas [1966]2002=2009: 282）。例えば、唾、血、乳、大便、涙などは肉体からそれが漏れ出るというただそれだけのことで、肉体の限界を超えたことになり、関心が示されることになる。

2.2 無秩序な存在の両義性

二つ目は、無秩序な存在が持つ両義的側面を提示した。前述の通り、無秩序なものは秩序を乱す存在として排除される。しかし時に聖なる目的に用いられることを指摘する。例えば、ブショング族において近親相姦は汚穢を生むとされ、通常は回避される。ところが、彼らの王を潔める儀式には近親相姦の儀式を含まねばならない（Douglas [1966]2002=2009: 357）。あるいはレレ族は、日常生活では忌み嫌われ、食されることのない動物を、秘儀においては食べ、豊饒の最も強力な源泉と見なす様子を紹介している（Douglas [1966]2002=2009: 371-3）。こうした現象は、聖なるものと不浄なるものが混同されているわけではなく、以下二点の理由によるという。一つ目は、無秩序は崩壊の象徴であるばかりではなく、始まりと成長

の象徴でもあるという理由だ。例えばダグラスは水の作用を例に挙げる。洪水はあらゆる形を破壊し、過去を洗い流してしまう。しかし無に帰すからこそ、あらゆる存在を浄化し、再生させる作用も併せ持つと述べる。無秩序な存在の中には、こうした再生や創造の能力が包含されていることを指摘する（Douglas [1966]2002=2009: 360）。二つ目は、形而上学的矛盾を統一するための援けとなるという理由だ。例えばダグラスは、「死を進んで迎えることによって死の力を弱める例」を指摘する。ディンカ族には、スピアマスターという祭司の一族が存在する。スピアマスターは神々との仲介者として、通常は神聖な存在として扱われる。しかし、スピアマスターが老いると、その命を奪う儀式が行われるという。重要なことは、この儀式はスピアマスター自らが、自身の死の時期・方法・場所を自由に、主体的に決心する点にある。主体的に命を奪うことで、死からその時期・場所という不確定性を奪い、共同体は秩序を保って生きられるという（Douglas [1966]2002=2009: 391-2）。既に確認した通り、私たちは普段、異例な存在が登場した場合、それを排除することで秩序を保ち、世界を支配する原理に一致させようとしている。しかし何らかの理由でそれが一致しない場合、自然に命ぜられるままの行動を取るのではなく、自ら行動を選び取ることで、善きものを生む偉大な能力の解放を期待するような、実存的思考が存在していることを指摘する（Douglas [1966]2002=2009: 393）。

2.3 汚穢の本質

ダグラスの議論は、不浄や汚穢に関する概念を一般化したといえる。特にそれを「場違いのもの」という直感的・感覚的に理解しやすい言葉で表現した功績は大きいと考えられる。

ただしダグラスの議論を援用する際、そこには二つの前提が存在することを押さえるべきだろう。一つ目は、社会を構造主義的に捉えていることだ。構造主義的に捉えるからこそ、不浄や汚穢を避ける理由を、衛生観念、医学の知識、道徳やマナーの切り口以外の視点から捉えることができる。この点は、廃棄の文化としてごみを捉えようとする筆者の視点とも親和性が高い。しかし注意すべきは、ダグラスの発想に従えば、「無秩序は秩序が存在するところに生まれる」という前提が存在することだ。無秩序な存在が単体で存在することはない。つまり、無秩序なごみに目を向けるということは同時に「どのような秩序を得ようとしているのか」という問いが存在することになる。こうした秩序概念の検討も必要となるだろう。加えて、ごみは秩序空間においては無秩序な存在であるが、存在が許される適切な場所においては、取るに足らない事項として、つまり秩序を乱す恐れのないものとして捉えられる。例えば、本来ごみを溜め込むべきではない家の中にごみを溜め込むから「ごみ屋敷」として社会問題化するのであって、ごみがごみ捨て場に溜め込まれていても、それは社会問題化しないということだ。ここで留意すべきは、ごみが存在することが許される場所の範囲が、時代とともに変化しているか、という点だ。もし時代とともに変化があるのならば、そこには何らかの社会的意識の変化が存在することとなるだろう。廃棄の文化の検討においては、重要な視点といえる。

二つ目は、「不浄や汚穢には本質的・普遍的な構造が存在する」という前提だ。ダグラスは、未開社会と西欧社会の汚穢に対する考え方の差に強い関心をみせている。すなわち、未開社会が不浄・汚穢ゆえに

汚物を排除するのに対し、西欧社会は衛生・美学・医学上の理由から排除するという差だ。ダグラスによればこの差は、人間と宇宙が直接結びついた世界観を持つか否かにあるという。ここで着目したいのは、ダグラスはどちらの世界観を持ったとしても、その根底には共通した「本質」が存在すると理解している点だ。ダグラスはそれを、以下のような言葉で表現している。

> 汚(けが)れに関する我々の概念から病因研究と衛生学とを捨象することができれば、そこに残されるのは、汚物とは場違いのものであるという例の定義であろう。(Douglas [1966]2002=2009: 103)

> 我々は聖なるものと世俗的なるものとの間に明確な一線を画す必要はないだろう。あらゆる場合に同一の原理があてはまるからである。さらにまた、我々は未開人と現代人との間に特別な区別を設ける必要もないであろう。なぜならば、人間はすべて同一の規範に支配されているからである。(Douglas [1966]2002=2009: 113)

「汚穢と禁忌」の多くの部分は、未開社会の事例や、宗教的タブーを根拠に説明がなされている。具体的には排泄物、唾、血、乳、涙、皮膚、爪、切られた毛髪、汗、死体、宗教的に食べることが禁じられる動物を取り上げている。しかしダグラスは「〔前略〕誰でもどこでも汚い物は不快だと感じるということを前提に〔後略〕」(Douglas [1966]2002=2009: 23)しているのであって、現代のごみに関しても「秩序・無秩序」の概念を用いることは可能であろう。実際に、私たちの日常生活にも馴染みのある例を挙げて、無秩序を排除しようとする原理を説明した箇所がある。やや長い引用にはなるが、以下に紹介する。

> 靴は本来汚いものではないが、それを食卓の上に置くことは汚いことなのだ。食物はそれ自体では汚くないが、調理用具を寝室に置いたり、食物を衣服になすりつけたりすることは汚いことなのである。同様に、応接室に浴室の器具を置いたり、椅子に衣服をかけておいたり、戸外で用いるべきものを室内にもちこんだり、二階に置くべきものを階下に下したり、上衣を着るべき場合に下着でいたり等々のことは汚いことなのである。要するに、汚穢に関する我々の行動は、一般に尊重されてきた分類を混乱させる観念とか、それと矛盾しそうな一切の対象または観念を非とする反応にほかならないのだ。(Douglas [1966]2002=2009: 103-4)

ダグラスの議論の価値の一つは、こうした議論の一般化を提示した点にあるといえるだろう。次に、ダグラスの議論に寄せられた批判を検討していく。

3. ミーグスの批判から捉えるごみ

3.1 汚穢と腐敗の関係

「汚穢と禁忌」は大きな反響を呼び、人類学、歴史学、宗教学、生物学など幅広い分野に影響を与えた。特に「レビ記第11章で食用が禁止される動物」に関する分析には、多くの批判が寄せられたといい、ラウトリッジ・クラシックス版への序では、ダグラス本人が修正文章を書いている。それほど各方面に大きな影響を与えたといえるだろう。

批判は多岐にわたるが、本稿では廃棄の文化の検討において特に重要だと思われる、人類学者のアンナ・S・ミーグスの指摘に着目したい（Meigs 1978）。ミーグスは、ダグラスの議論が汚穢と散らかりを混同していることを指摘した。ミーグスによれば、ダグラスの述べる異例なものや無秩序なものの大部分は、汚穢を生み出すものではないという（Meigs 1978: 310）。例えば、ダグラスは先に紹介した通り「靴は本来汚いものではないが、それを食卓の上に置くことは汚いことなのだ」と主張した。これに対してミーグスは、もし食卓の上に置かれたものが靴ではなく、玩具の船、文房具、ペーパータオル1巻、新しい洋服であった場合を指摘する。確かにそれらは靴と同じくらい「場違いなもの」であるが、私たちはそれを汚いとか、穢れているとは感じない。むしろこの状態には「散らかり（messy）」という言葉が適切であり、ダグラスが汚穢に分類するものの多くは、この「散らかり」に分類できると指摘した（Meigs 1978: 310）。

ダグラスの汚穢に関する考え方が多様な概念を包括している点は、ミーグス以外の研究者も指摘している。例えば、歴史学者の小谷汪之は、ダグラスの穢れ論は「本質還元論的アプローチ」だと指摘する（小谷 1999）。小谷によればダグラスは、あらゆる穢れは「場違いのもの」という共通の本質を持つと捉えているが、なぜダグラスがそう考えるのか、その根拠が示されていない。最初から「周知のように、穢れの本質は無秩序である」という命題が論拠抜きに、断定的に呈示されているだけだと批判する（小谷 1999: 59）。小谷は汚穢を、「起源的に異なる多様な複合体」と捉え、本質に還元することへは懐疑的な姿勢を示している。汚穢の概念に関しては、人類学者の波平恵美子も小谷と同様の認識を見せている。「〔前略〕『ケガレ』は複雑な内容を持ち、日本人の信仰や象徴体系に深く、しかも入り組んだ形で包み込まれている観念である」（波平 1985: 34）と述べ、複雑な観念である汚穢を、一つの説明や結論へ収れんすることに批判的姿勢を示している。

ミーグスは、ダグラスの幅広い汚穢の概念をより精緻に定義しなおすために、パプアニューギニアのハイランド地方のフア人（Hua）社会とアメリカ人社会の、言葉やタブーに関する分析を行った[2)]。そして汚穢の概念には、三つの条件が必要であると結論づけた。一つ目は「腐敗していくと知覚される物質、そのような物質の運搬人や象徴であること」、二つ目は「これらの物質、運搬人、象徴が、体に接近する恐れをいだかせる文脈」、三つ目は「その接近が望まれないこと」である（Meigs 1978: 313）。例えばフア人にはヌ（Nu）という概念が存在する。ヌとは、生活、生命力、セクシュアリティ、若さの源であり、具体的には血、糞尿、汗、唾液などが該当する。ヌの損失や汚染は、健康の喪失、老化、死をもたらすため、ヌとの接触を避けることが命じられている。つまりヌが体内にとどまるうちはプラスの働きをするが、

体外に出るとシロ・ナ（Siro na）という汚穢概念として理解されるという。そして特に高いヌの中身を持つものは、すぐに熟し、腐る性質を持つことを指摘する。さらには、ヌは成長を促進し腐敗を生み出すことを指摘し、汚穢概念において腐敗が重要な概念であることを結論づけている。アメリカ社会においても、アメリカ人が本能的に他者の流出物（血、糞尿、汗、唾液など）との接触をひるむのは、流出物が持つ腐敗の力に対する恐れの表れだと述べた。このように、汚穢には「腐敗」の概念が大きな意味を持つことを示した。

ミーグスが重視した「腐敗」の概念について、ダグラスはどのような理解を示しているのだろうか。ダグラスは腐敗に関して、明示的な言及はしていない。しかしながら、ダグラスの両義性に関する議論の端々に、腐敗の概念が前提として存在する様子を見て取れる。例えばダグラスは穢れの本質について以下のように述べる。「〔前略〕穢れと見做されるものはそれが物質であるかぎり、長い過程を経て粉砕され、分解され、腐敗し、最後にあらゆる痕跡は消滅する。さまざまな旧きものの起源は見失われ、それは多くのありふれた価値なきものとまじりあってしまう」（Douglas [1966]2002=2009: 358）。あるいは「こうしてすべてが崩壊した最後の段階では、穢れは完全に明確な形態を失う。ここで一つの円環が完成したのである」（Douglas [1966]2002=2009: 359）と述べている。腐敗という概念は、ダグラスの汚穢の概念においても前提として存在する、重要なキーワードと理解できるだろう。

3.2 プラスチックごみがもたらす意識の変化

「腐敗」の概念は、ダグラスの議論をごみに援用するうえで、大変興味深い視点である。なぜなら、現代の日本社会のごみには、腐敗しないものが含まれるからだ。それはプラスチックに代表される燃やせないごみである。

そもそもプラスチックはいつ頃から登場し、いつ頃からごみとして出されるようになったのだろうか。プラスチックに関する朝日新聞の新聞記事を1945年から2017年現在まで概観すると[3)]、以下のような傾向が見られた。1940年代は「プラスチックス展」の案内記事のみであるが、1950～1960年代には「プラスチック製品の選び方」（『朝日新聞』1962.11.15東京朝刊，8面）、「プラスチックかごのよごれを落すには」（『朝日新聞』1969.7.29東京朝刊，11面）といった取り扱いのハウツーものや、「プラスチックス

今年の回顧と新年の期待」（『朝日新聞』1953.12.28東京朝刊，4面）、「これからのプラスチック製品」（『朝日新聞』1963.4.2東京朝刊，9面）など、今後に期待を寄せる記事が目立ちはじめた。生活の中に劇的にプラスチック製品が流入した様子は、「プラスチック時代」「素材革命」という言葉が多用される点からも読み取ることができる。それは「今ではわたしたちの暮しと切離しては考えられないほど」（『朝日新聞』1962.11.15東京朝刊，8面）浸透し、生活を変えたという。プラスチックが初めて「ごみ」として話題にのぼったのは1970年代だ。以降プラスチックごみは「廃棄物公害の元凶」として語られ、「〔前略〕プラスチックを使わないでも済むものにまで日本は作りすぎているんだ」（『朝日新聞』1971.3.17東京朝刊，19面）というような、否定的な語りが登場する。

プラスチックごみの登場は、人間のごみに対する意識にどのようなインパクトを与えたのだろうか。そ

れは「やっかい」という言葉に象徴されている。例えば、「廃棄物処理の中でいま、一番厄介で、煮ても焼いても始末の悪いのがプラスチック」(『朝日新聞』1972.4.2東京朝刊，3面)、「プラスチックは埋立ててもいつまでも腐らずにのさばっているし、燃やせば焼却炉を痛めるやっかいものといわれてきた〔後略〕」(『朝日新聞』1972.12.14東京朝刊，17面）などのようにである。

「やっかい」に込められる意味は二つ解釈できる。一つ目は「モノは腐る」あるいは「ごみは焼却場で焼き尽くす」というそれまでのごみの常識を大きく変化させたことだ。そこには、プラスチックがごみとなることへのとまどいや違和感をみることができる。

> かつてゴミは土に戻って行くものだった。新しい物質プラスチックが出来て、文字通り煮ても焼いてもどうにもならないゴミが出現した。(『朝日新聞』1974.6.25 東京朝刊，12 面）

> 燃えるものはわかるが、燃えないものといってもどれがどうだかわからない。(『朝日新聞』1971.6.5 東京朝刊，13 面）

「やっかい」に込められる意味の二つ目は、ごみが生活空間の中に「滞留」するようになり、人間とごみの住み分けの問題、すなわちごみの「置場」の問題を考えざるを得ない状況を生み出したことである。プラスチックごみの誕生・増加に伴いスタートした分別収集は[4)]、プラスチックごみの廃棄日を週1回に限定し、1週間分のごみを家の中に溜めておかなければならない状況をうんだ（東京都清掃局総務部総務課編 2000)。生活空間に滞留し、置場を必要としたごみは、人々の悩みの種となる。例えばある44才の主婦は、以下のようにその状況を述べている。

> いままでは水気のある台所のごみでも庭の雑草でも何でもいっしょくたにしてポリバケツに入れて出せばよかったのが、紙袋だと水気のある物で破れてはいけないと、台所のごみはざるのようなもので水気を切り、日に干す手間もたいへん。たばこのかすは火でも出ないかと心配だし、三種類を分類しておく場所も必要だし、出す日の朝は時間がかかるし。(『朝日新聞』1971.6.5 東京朝刊，13 面）

「やっかい」に象徴される、プラスチックごみへの違和感は1970年代に広く登場し、以降こうした言説はあまり見られない。1970年代とはプラスチックごみが誕生し、人間のごみに対する認識や、ごみとの関係における転換点といえるだろう。それは、プラスチックごみの登場以降、ごみを分析する際にダグラスの議論が全く意味をなさなくなったわけではない。その変化により、何が変化したのかを捉える必要があるということだ。

4. ヘザーリントンの批判から捉えるごみ

4.1 秩序・無秩序間の流動性

廃棄の文化を検討するうえで、もう一つ取り上げたいのが、「処分（disposal）」の概念の再定義を行った、社会学者のケヴィン・ヘザーリントンの議論だ（Hetherington 2004）。ヘザーリントンは、ダグラスのアプローチは処分の概念を永続的に捉えすぎていると批判した（Hetherington 2004: 162）。ダグラスの発想に従えば、処分とは、秩序を侵す存在に対して実行される行為だ。一方ヘザーリントンは、秩序構築のために一度は無秩序な存在とみなされ、処分された対象であっても、それが再び秩序的な存在に戻るケースを指摘する。例えば、人間が価値のないモノも保存しておくのは、そのモノが思い出や記憶を呼び起こす可能性がある、「心情的価値」を持つからだと指摘する（Hetherington 2004: 166）。つまり、一見無秩序に見える存在であっても、見方を変えると価値のある秩序的存在に変化することを指摘する。さらには、一時的に秩序あるいは無秩序のカテゴリーに留まる存在も指摘する。例えば、人類学・社会学者であるロベール・エルツの「二重葬儀」の事例を挙げて、「一時停止（abeyance）」という状態が存在することを指摘している（Hetherington 2004: 168-70）。エルツによれば、インドネシアの諸民族には、人が死ぬとすぐに葬儀を行うのではなく、一定期間死体を家の中や、死体専用の家に置く民族が多くいるという。彼らはまず仮の葬儀を行い、一年もしくはそれ以上の期間をおいてから本葬を行う。それは、人は死んでも魂はまだこの世に多少でも属しており、死者はこの世の暮しを終えていないからだと分析した。この間死者は悪さをする恐れがあるため、近親者は喪に服す必要があるとされる。そして一定期間（それは死体の肉が腐り、完全に骨になる期間に相当するという）を経ると、魂は先祖の世界へ旅立つことができる。この時本葬を行い、本当に死んだと理解される。この状態になれば死者は悪さをしないため、近親者の喪があけると分析した（Hertz 1928=2001）。ヘザーリントンは、この仮葬の期間のような状態が、処分の概念にも存在すると考える。その期間を「一時停止（abeyance）」と呼んだ。こうした処分のイメージは、秩序・無秩序の二つの空間に区切りを設けながらも、その間を自由に行き来できる「ドア」に近しい存在だと述べる（Hetherington 2004: 164）。このように、ダグラスが秩序・無秩序というカテゴリーを断絶的な二項対立と理解したのに対し、ヘザーリントンは秩序・無秩序のカテゴリー間の流動性を指摘した。

4.2 不要物がもたらす意識の変化

ヘザーリントンの「一時停止」という状態は、現代の日本社会においても往々に見られる現象といえるだろう。近年、片づけコンサルタントである近藤麻理恵の「人生がときめく片づけの魔法」という本が大ブームとなった。どのようにモノを片づけるべきか（概ね捨てるべきか）について記されている。近藤は著書の中で、もったいなくてモノを捨てられない場合、そのモノがもつ本当の役割を考えるように示唆している。例えば、ほとんど着ていない洋服があった場合、なぜその洋服を買ったのか考えるように述べる。買った瞬間にときめいていたのならば、その洋服は「買う瞬間のときめき」を与えるという役割を果たしたことになる。次になぜその洋服をほとんど着なかったのかを考えるのだという。すると「こういう洋服

は自分には似合わない」ということを教える役割を果たしたと理解できるという。つまりその洋服は、既に十分に役割を果たしているので、捨てて構わないとアドバイスしている（近藤 2011: 86-7）。ここで近藤が示唆しているのは、一時停止状態に置かれているモノを、永久的に無秩序のカテゴリーへ移動することだと解釈できる。こうしたアドバイスを求める社会とは、一時停止状態のモノが増えていることを、逆説的に示しているだろう。

近藤が捨てるよう示唆した対象とは、「不要物」に分類できるだろう。ごみに関する朝日新聞の新聞記事を1945年から2017年現在まで概観した時[5]、高度経済成長期以降に家電製品や大型家具を中心とした「不要物」に関する記事が登場することに気づく。例えば以下の記事では、まだ使える家電製品であっても、もう使わなくなる様子が記されている。

> 科学的技術の進歩に伴い、新しい機種の電気機器が次々と生産され、消費者もいとも簡単に買い替えていく物余りの時代である。また、修理すればまだ使えるのに新しく買った方が得な場合もある。（『朝日新聞』1989.9.2 朝刊，5 面）

日常生活を考えると、不要物は住宅の改修、新築、引越しなどの際に、特に多く排出される。都市部への人口流入が著しく増加し、引越しが多く発生した高度経済成長期には、大量の不要物が発生したと考えられる。当時の洋風住宅やマイホームへの憧れは、改装や新築を増加したのではないだろうか。このように、ごみでもモノでもない、その中間に位置する「不要物」の存在が、住宅の改修、新築、引越しなどの場面で存在感を強めていったと考えられる。

また不要物はプラスチックごみと同様に、生活空間に滞留し、家の中に置場を必要とする流れも生み出した。生活空間に滞留する不要物の「置場問題」について言及する記述には、以下のようなものがある。

> ある家庭で子供が成長して、自転車を買い替えた場合、それまで使っていたものは不要になる。まだ使えるものを捨てるのは惜しいと素直に感じる。しかし、今の住宅事情からいって、不要な物が居住空間を占拠するのは許されない。〔中略〕かくして、この自転車は廃棄物となり、地方自治体の手で収集、処理、処分される。（『朝日新聞』1982.1.28 東京朝刊，5 面）

不要物とは、生ごみや屑ごみのように、「もう使えないから」ごみになるのではなく、「もう使わないから」ごみになる傾向があるだろう。それは誰が見てもごみであるという一律的な存在から、見る人によってごみであったりそうでなかったりする、多元的な存在へと変化する。こうした傾向は、ごみ屋敷が社会問題化する要因とも大きく関係しているように考えられる。

5. 廃棄の文化の検討に向けて

本稿は、近年の「ごみ屋敷問題」の台頭を議論のスタートに、ごみは環境・衛生問題、道徳意識の視点にとどまらず、「廃棄の文化」の視点から捉え直す必要があることを示した。そして、「廃棄の文化」を検討するうえで大きな影響を与えると考えられる、ダグラスの議論を概観した。「秩序・無秩序」「両義性」の議論を検討したのち、ダグラスの議論に対するミーグスとヘザーリントンの批判を紹介した。以上の議論をもとに、日本社会における分析を行った。そして廃棄の文化を検討するうえで、二つの留意すべき点がみえてきた。一つ目は「腐敗しない」という観点から、プラスチックごみに着目すること。二つ目は、秩序・無秩序のカテゴリー間の流動性の観点から、不要物に着目することだ。

ここまでの整理で明らかになったことは、日本社会を分析するうえでは、「高度経済成長期」がごみと人間の関わりにおける、一つの「転換点」であることだ。この時期はプラスチックごみや不要物の登場・増加により「ごみの質」が大きく変化した。こうしたごみの出現は、その性質から分別収集を余儀なくし「ごみは焼却場で焼き尽くす」というそれまでの常識を大きく変化させた。同時に、ごみの定時収集が定着した時期でもある。定時収集は、東京オリンピック開催を控えた東京都が、町の美化を推進するために1961年から開始した。ごみはポリエチレン製ごみ容器に入れ、決められた場所に決められた時刻に出す「ステーション方式」が導入された（東京都清掃局総務部総務課編 2000）。

このように高度経済成長期とは、今日的なごみ出しやごみ捨て方法が定着し始め、ごみにまつわる現代的な風景が生まれた時期である。この意味で、現在のごみと人間の関係や認識の基礎を築いた時期と位置づけられる。現在のごみと人間の関係を捉えるためには、「現在だけ」を見ていては、その特徴を掴むことは難しい。今や「あたりまえ」となってしまったことが大きな意味を持つ。そこで、現在のあたりまえが構築される転換点としての高度経済成長期に注目し、過渡期ゆえに表出する「困惑」や「違和感」を捉え、現在の特徴を把握する必要がある。本作業を通して、廃棄の文化は分析可能となるだろう。

文献

[1] Douglas, Mary, [1966]2002, *Purity and Danger: An Analysis of Concepts of Pollution and Taboo*, London: Routledge.（＝2009，塚本利明訳『汚穢と禁忌』筑摩書房.）

[2] Frost, Randy O and Gail Steketee, 2010, *Stuff: Compulsive Hoarding and the Meaning of Things*, Boston: Houghton Mifflin Harcourt.（＝ 2012，春日井晶子訳『ホーダー――捨てられない・片づけられない病』日経ナショナルジオグラフィック社.）

[3] Hertz, Robert, 1928, “Contribution a une étude sur la représentation collective de la mort,” Robert Hertz, *Mélanges de sociologie religieuse et folklore*, Paris: Librairie Félix Alcan, 1-98.（=2001，内藤莞爾訳「死の宗教社会学――死の集合表象研究への寄与」吉田禎吾・内藤莞爾・板橋作美訳『右手の優越』筑摩書房，37-138.）

[4] Hetherington, Kevin, 2004, “Secondhandedness: Consumption, Disposal, and Absent Presence,” *Environment and Planning D: Society and Space*, 22(1): 157-73.

[5] 池内裕美，2014，「人はなぜモノを溜め込むのか――ホーディング傾向尺度の作成とアニミズムとの関連性の検討」『社会心理学研究』30(2): 86-98.

[6] 勝部麗子，2011，「地域と人を再び結ぶコミュニティソーシャルワーカー――ゴミ屋敷支援の取組を通じて」『月刊自治研』53(616): 54-60.
[7] 国土交通省，2009，『地域に著しい迷惑（外部不経済）をもたらす土地利用の実態把握アンケート結果』.
[8] 近藤麻理恵，2011，『人生がときめく片づけの魔法』サンマーク出版.
[9] 小谷汪之，1999，「穢れと賤民差別との関係についての原理的考察」『部落解放なら』11: 58-69.
[10] Meigs, Anna S, 1978, "A Papuan Perspective on Pollution," *Man New Series*, 13(2): 304-18.
[11] 波平恵美子，1985，『民俗宗教シリーズ ケガレ』東京堂出版.
[12] 関根康正，1995，『ケガレの人類学――南インド・ハリジャンの生活世界』東京大学出版会.
[13] 東京都清掃局総務部総務課編，2000，『東京都清掃事業百年史』東京都環境整備公社.
[14] 梅川由紀，2017，「『ごみ屋敷』を通してみるごみとモノの意味――当事者 A さんの事例から」『ソシオロジ』62(1): 23-40.

注

1）ごみ屋敷は日本固有の現象ではなく、今や世界中で問題と化している。アメリカでは 1990 年代から精神医学などの分野で研究がなされるようになったが（池内 2014）、既に 1940 年代にはニューヨーク市のコリヤー兄弟の自宅がごみ屋敷状態であったことが確認されている（Frost and Steketee 2010=2012）。コリヤー兄弟は、自宅内で亡くなり、警察が家の中に立ち入ることで自宅の様子が明らかとなった。弟は自宅内で落下したごみに押しつぶされ窒息死した。盲目の兄は、弟の死後亡くなっていたという。コリヤー邸は 1947 年に解体され、1951 年に売却された。1965 年にはそこに小さな公園ができ「コリヤー兄弟公園」と名付けられた（Frost and Steketee 2010=2012: 6-19）。

2）汚穢概念の精緻化に関しては、ミーグスの他に人類学者の関根康正も分析している。関根はダグラスやミーグスの議論を踏まえて、汚穢と不浄の概念を区別した（関根 1995）。

3）朝日新聞のデータベースを使い、「プラスチック」というキーワードで検索を行った。検索対象は、記事の見出しのみとした。

4）東京都の場合、1973 年から分別収集を開始した。特に焼却不適ごみ（プラスチック、ゴム類など）の分別に力点を置いて実施した（東京都清掃局総務部総務課編 2000）。

5）朝日新聞のデータベースを使い、「ごみ」というキーワードで検索を行った。検索対象は、記事の見出しのみとした。

Theoretical Study on the “Culture of Waste” based on Mary Douglas’s Theory

Yuki UMEKAWA

Abstract:

In today’s world, hoarders often provide us with sensational news; this issue has been investigated into with the main focus being on the distinction between “waste” and “stuff.” While the problem of hoarding started around the mid-2000s, there have always been hoarders in society, with newspaper reports dating back as far as 1968. While in 1968, hoarding was considered just a phenomenon, this trend shifted around the mid-2000s when hoarding began to be viewed as a problem.

While there have been significant efforts in Japan to properly reduce and dispose waste, problems related to hoarding have highlighted the possible and deep relationship between waste, society, and culture. Therefore, it is no longer possible to only see waste as an environmental problem, a public health problem, or as a moral issue, as it is necessary to delve deeper into the following questions: what does waste mean for people? how do people treat waste? and what benefits do people derive from waste? In this paper, waste and waste disposal are reconsidered from a “culture of waste” perspective, which is related to the changes in people’s social lives and consciousness.

First, to lay the foundation, the “culture of waste” is reexamined based on the theory proposed by Mary Douglas, in which the theory of “order and disorder” and the argument of “ambiguity” are elucidated. Then, these arguments are further examined in the light of the theoretical criticisms of Douglas’s theory by Anna S. Meigs and Kevin Hetherington. Finally, after these in-depth examinations, the essential issues related to the “culture of waste” are summarized.

Key Words : waste, problem of hoarding, order and disorder, Mary Douglas theory, culture of waste